

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	田附 紘平
論文題目	クライアントの内的体験理解の鍵としてのアタッチメント理論の意義		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究はクライアントの内的体験を理解する鍵としてアタッチメント理論が果たす意義について検討したものである。</p> <p>序章では、クライアントの内的体験理解にアタッチメント理論にもとづいた研究を行う意義が考察された。アタッチメント理論は乳幼児と養育者の二者関係について探究するものであり、心理療法も同様に二者関係を基本とする営みであり、アタッチメント理論は心理療法におけるクライアントーセラピスト関係の力動的理解、つまり転移理解を深めることに役立つと考えられた。しかし、アタッチメント理論はこれまで精神分析では重要視されず、主に発達心理学で発展をみてきた。近年、力動的心理療法でもアタッチメント理論の重要性が再認識され、両者の関連に関する心理療法研究も出てきているが、それらはいずれもクライアントの立場からの体験の理解に乏しいという課題があることが指摘された。</p> <p>第一章では、アタッチメント理論の歴史的変遷を追いながら、アタッチメント理論と精神分析の間の隔たりについて検討された。アタッチメント理論は、相互の密接な関連を想定した「reality」および「actuality」の概念で考えるならば、それらの不可分性を前提とした捉え方をするように変化してきており、それは間主観的なアプローチをとる精神分析とも共通していることが示された。アタッチメント理論と間主観的な精神分析がともに探究する「当人が実在する外界と関わるなかでその場を意味づけ、迫真性をもって体験すること」が内的体験として定義された。しかし、アタッチメント理論は情報処理理論にもとづいて当人の外側の視点から内的体験を推測、説明するのに対し、間主観的な精神分析はクライアント自身の視点から内省的に描かれる内的体験を明らかにしようと試みており、アタッチメント理論と間主観的な精神分析の間には、内的体験を捉えようとする視点に差異があることが指摘された。</p> <p>第二章では、まずアタッチメントパターン概念について整理され、本研究におけるアタッチメントパターンの捉え方が示された。クライアントのアタッチメントパターンと心理療法の関連についての先行研究が概観され、その成果と課題について検討された。その結果、クライアントによる心理療法の意味づけおよび体験について正面から検討することで、クライアントの本質により迫ることができると考えられた。</p> <p>第三章から第六章では、クライアントによる心理療法の意味づけや体験について理解する手がかりを得るための基礎的研究・調査研究が論じられた。まず第三章では、アタッチメントパターンと自己イメージとの関連について述べられた。20 答法という質問紙法を用いて自己イメージを測定し、得られたデータをテキストマイニングおよび個別事例により検討することで、各アタッチメントパターンにおける自己イメージの内的意味構造が明らかにされた。これにより、各アタッチメントパターンを示すクライアントが有する自己表象および、それに伴う心理療法の場での体験の特徴に関して示唆が得られた。</p> <p>第四章では、アタッチメントパターンと親イメージの関連を検討した質問紙調査について論じられた。第三章と同様、アタッチメントパターンと親イメージの内的意味構造の関連についてテキストマイニングおよび個別事例から検討され、得られた結果は、各アタッチメントパターンを示すクライアントが有する親をはじめとした重要な他者に関する表象および、彼らが心理療法においてセラピストに向けやすい情緒につ</p>			

いて理解を深めることに役立つと考えられた。

第五章では、アタッチメントパターンとセラピストへの注目や印象の関連を検討した心理療法場面の映像観察調査が検討された。この調査では、特にセラピストの表情、動作、言葉の非言語的側面といった、非言語コミュニケーションへの注目やセラピストへの印象とアタッチメントパターンの関連を明らかにすることが目指された。これにより、各アタッチメントパターンをもつクライアントによるセラピストへの注目の仕方や印象の抱き方について探究する手がかりが得られると考えられた。

第六章では、アタッチメントパターンと自分について語る体験の関連を検討した面接調査について論じられた。得られたデータは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチおよび個別事例から検討された。その結果は、各アタッチメントパターンをもつクライアントが心理療法において自らについて語る際に体験する内的プロセスについて理解を深める端緒となると考えられた。

終章では、これまで指摘された各アタッチメントパターンを示すクライアントの内的体験の特徴が仮説としてまとめられ、二つの症例検討をもとに治療的变化をもたらすクライアントの体験について検討された。本研究全体を通して、クライアントの内的体験理解の鍵としてアタッチメント理論が果たす意義は、各アタッチメントパターンをもつクライアントがどのような内的体験をしやすいかに関する仮説を提供すること、および心理療法において実在するセラピストが異質性と同質性の二重性を孕んだ存在としてクライアントに迫真性をもって体験されること自体の重要性を示すことにあると論じられた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、発達心理学にて主に展開してきたアタッチメント理論が、力動的心理療法の発展にどのように寄与するかに関して、正面から取り組んだ意欲作である。このテーマは、学位申請者が卒業論文から一貫して取り組んできたものであり、これまで精力的に執筆してきた査読付学会誌論文3本、本研究科紀要2本をもとにしつつ、さらに有機的に体系づけ深めたものが本論文である。

もとよりアタッチメント概念は、精神分析家ボウルビィにより提唱されたものであるが、この理論が外的な観察にもとづいていることから、無意識を仮定し内的世界を重視する精神分析からは、十分に評価されてこなかった。本論文ではこうした歴史的展開を丁寧に辿ったうえで、乳幼児観察や間主観性に着目した新たな精神分析の発展と、内的体験や主観に着目するようになった近年のアタッチメント理論の発展とが、差異をもちつつも接近可能であることを、詳細な先行研究レビューにて示した。その作業の際に導入された **reality** と **actuality** という対比は、当人にとっての主観的現実と外的に観察可能な現実とを整理するうえできわめて有用な観点であるとともに、二つの異なるパラダイムを架橋する重要なものであった。

本論文の主たる目的はタイトルが示すとおり、アタッチメント理論を参照することで、心理療法場面におけるクライアントの内的体験を詳細に具体的に理解しようとするものである。第三章から第六章で展開された実証的な調査研究は、まさにその目的に一步ずつ近づくための道標である。第三章では、「私は」という刺激語に続けて自己に関する記述を積み重ねていく「20 答法」の回答パターンを検討することで、アタッチメントスタイル4 類型それぞれにおいて、回答者がどのような自己表象をもっているか、また自己を開示するときどのような体験をするのかということが検討された。アタッチメントスタイルは、対人場面を解釈し意味づける際の情報処理スキーマとして考えられることが多いが、本論文では、個人が構成し参照する自己表象・自己イメージとしての意義に焦点を当てて検討しており、その独創性が評価された。第四章では、そうした自己表象が親イメージとどのように関連するかが詳細に検討され、重要な他者表象からの自己表象の起源に関する議論につながるばかりでなく、心理療法場面におけるクライアントのセラピストへの転移を理解する視点も示された。これを踏まえ第五章では、心理療法場面のビデオ映像を観察する際に、アタッチメントスタイルにより着目点や惹起される感情にどのような違いがあるかが検討され、クライアントの体験理解に関する手がかりが、有機的に提供された。第六章では、心理面接とおなじく「自分について語る」際に、どのような語りの変化のプロセスがあるか、どのような感情が去来し、それに伴いどのような自己開示や自己隠蔽がありうるのかといったことが、アタッチメントスタイルごとに時系列的に検討された。そこでは、自分語りおよび事後インタビューのプロトコルが、グラウンディッド・セオリーおよび事例研究により丁寧に分析され、内的体験を理解する鍵が豊富に示されている。終章では、著名な精神分析家の事例における重要な展開点を含むセッションを、本論文の研究成果を統合的に参照しつつ再読し、これまで行間に埋もれていたクライアントの内的体験と微細な心の動きを見事に描きだした。

このように本論文は、精緻な論の組み立てと丁寧な実証にもとづく、きわめて完成度が高いものである。そればかりでなく、心理臨床の実践を常に顧慮し実証と理論を緊密につなげている点からも、高く評価された。本論文の丹念な研究から描き出された、対象者の内的な体験や不安、それらの経時的変化のアタッチメントスタイルによる差異は、実際の心理療法で熟練したセラピストがもつ直観と極めて近いものであった。このことは、本研究が心理臨床での経験知・実践知を実証的に示してみせたことの証左であり、研究結果の妥当性を示すものでもある。そして本論文の何よりの功績

は、そこで示された知見を、これまでの心理臨床や精神分析の知見と組み合わせることで、既存の知に新たな意味と解釈可能性を与えたことである。

しかし問題がないわけではない。口頭試問で指摘されたのは、アタッチメントスタイルの4類型を一貫して使用しており、この類型が導出される研究の視点やコンテキストに関するメタ的な考察が甘いこと、調査対象をもっぱら健常な青年としており、臨床群との差異や関連づけに関して考察が欠けていること、調査対象者の自己報告をデータとしているが、この自己報告は複層的な内的体験の総体の中でどのような位置にあるかに関する考察が欠けていること、などである。しかしながら、こうした問題点は、本論文が到達した地平においてこそ明確に浮かび上がってくるものであり、本論文のこれからの発展可能性を示すものであり、何ら本論文の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成 年 月 日以降